

高齢者の心身の特性、就業状態、所得の状況

高齢者の心身の特性、就業状態、所得の状況は、後期高齢者(75歳以上)と前期高齢者(65~74歳)とではかなり異なると考えられる。

①心身の特性

後期高齢者は、前期高齢者に比べ、生理的機能の低下や日常生活動作能力の低下による症候が増加するとともに、生活習慣病を原因とする疾患を中心に、入院による受療が増加する傾向にある。

②就業状態

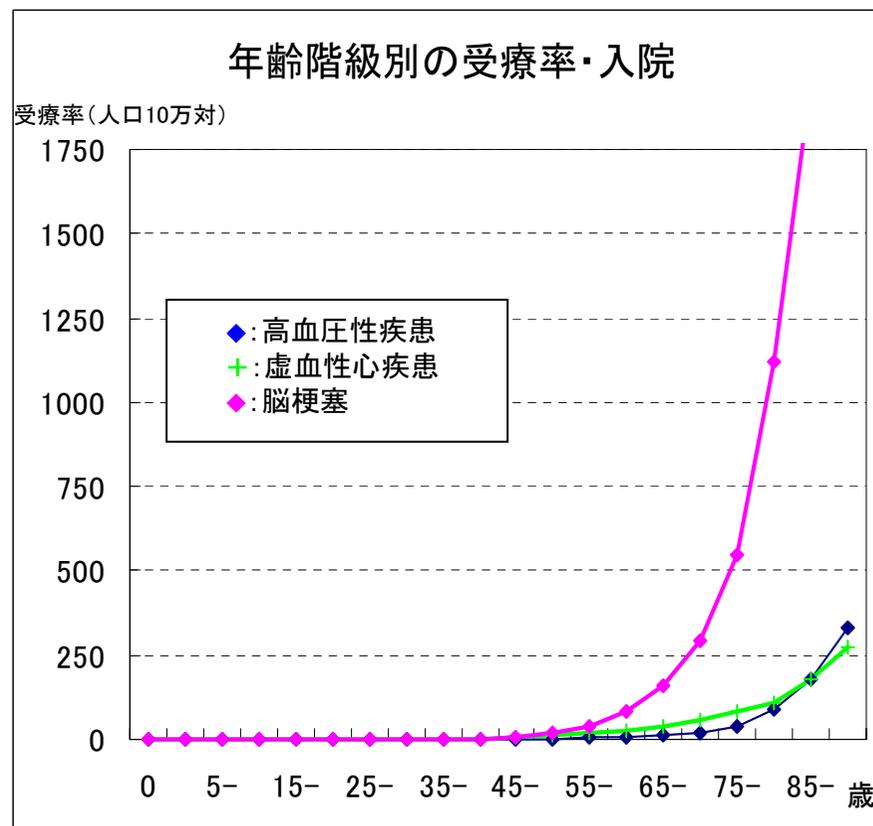
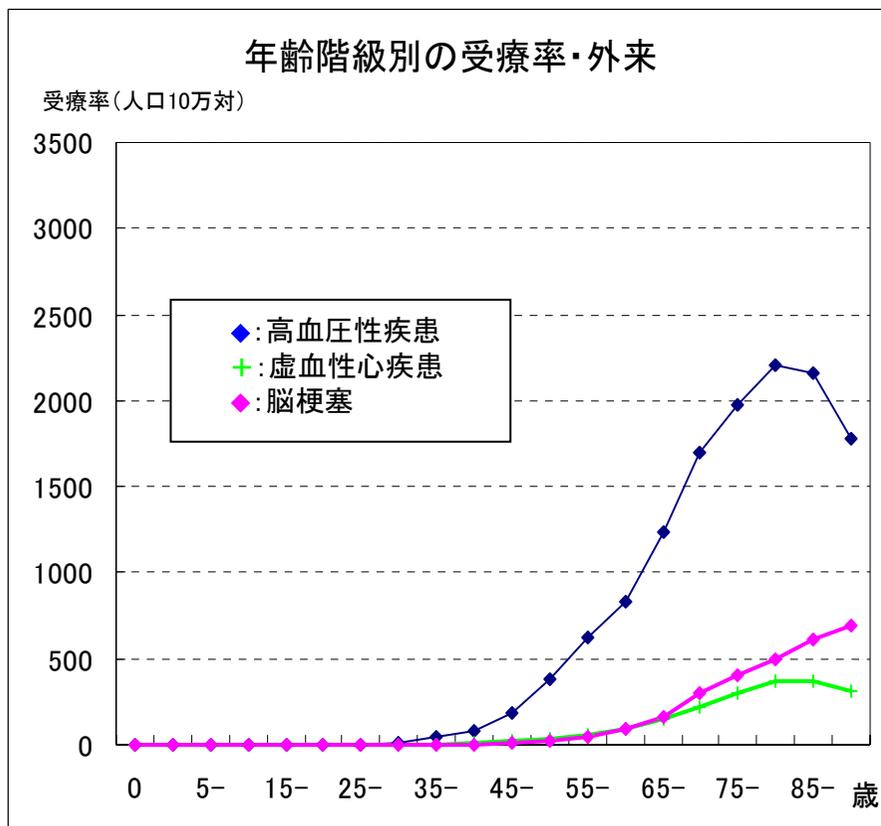
就業している者は、前期高齢者では27.6%であるのに比べ、後期高齢者では9.0%に過ぎない。(平成16年度労働力調査(総務省統計局))

③所得の状況

1人当たり平均収入(年額)は、前期高齢者で218万円、後期高齢者で156万円となっている。(平成13年国民生活基礎調査(厚生労働省統計情報部)をもとに集計)

高齢者の心身の特性（疾病特性等）

疾病全体で見ると、外来は壮年期から又は加齢に伴い増加するが、入院受療率（病院・診療所で受療した患者数を人口10万人対で表した数）は後期高齢期になって増加する傾向にあり、特に、生活習慣病のうち高血圧性疾患、虚血性心疾患、脳梗塞については、こうした傾向が顕著に現れている。



年齢階級別1人当たり医療費(年額)

1人当たり医科診療費を見ると、前期高齢期までは入院より入院外（外来）の方が比率が高いが、後期高齢期に入るとその比率が逆転する。

(医療費計)

(医科診療費)

